

マイ・タイムライン検討ツール 「逃げキッド」を活用した 防災教育の事例

一般財団法人河川情報センター 流域情報事業部 参事 あゆかわ かずふみ 鮎川 一史

1. はじめに

近年、平成 30 年 7 月豪雨や令和元年東日本台風（台風第 19 号）など、全国各地で毎年大規模な水害が頻発しており、今後もどこで洪水が発生してもおかしくない状況となっている。

洪水は突発的に発生する地震とは異なり、リードタイムがあるため、適切な事前行動をとれば被害を軽減できる可能性がある一方で、備えが不十分な場合には助かるかもしれない命が失われる被害が生じている。

多発する水災害から命を守るためには、行政のサポートの下に、最終的に避難行動をとる住民一人ひとりが自分自身に降りかかる水害リスクを把握し、自分自身の家族構成や生活環境に合った防災行動をとる能力を身につけることが重要である。そのためのツールとして、水害ハザードマップがあり、そこに記載されている内容は非常に重要である。

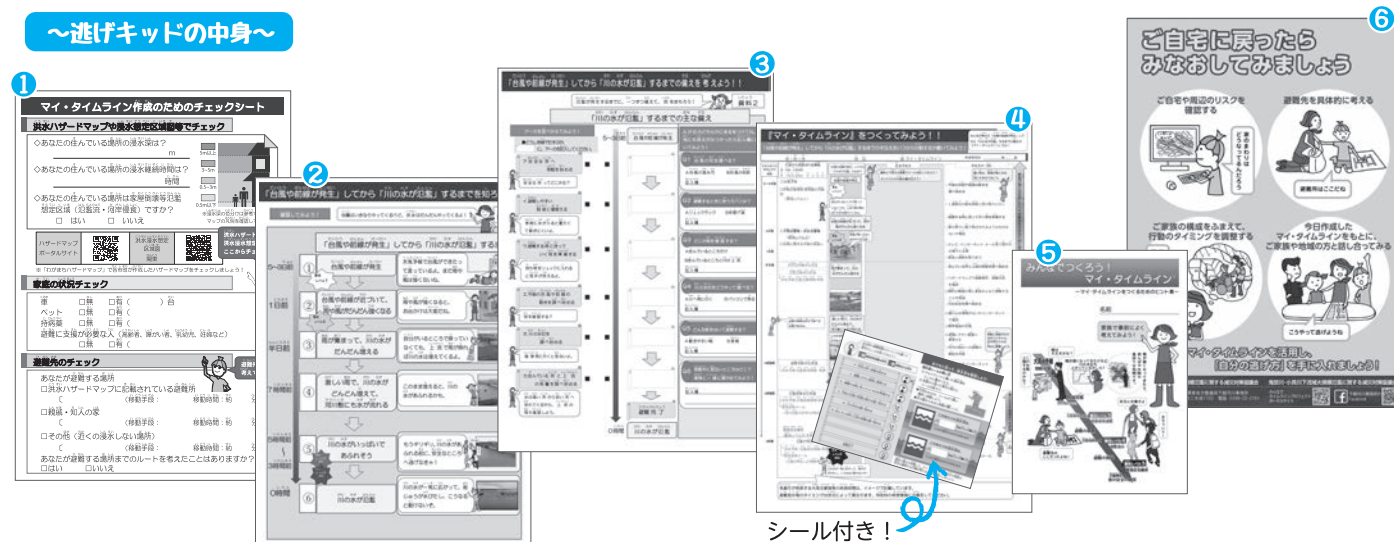
ハザードマップは市区町村で作成・公表されているが、さまざまな調査結果によると、内容を十分に理解している住民は 3 割程度と非常に少ないのが現状である。ハザードマップを水害時の住民等の避難に有効活用するには、作成・公表するだけでなく、作成した内容をさまざまな機会を通じ

て継続的に周知することが必要であり、その一つの方法として、近年注目されているのが「マイ・タイムライン」の検討によるハザードマップの理解促進である。

マイ・タイムラインは住民一人ひとりのタイムライン（防災行動計画）であり、台風等の接近による大雨で河川の水位が上昇する時に、自分自身がとる標準的な防災行動を時系列的に整理し、住民自ら考え、命を守る避難行動のための一助とするものである。その検討過程では、市区町村が作成・公表した水害ハザードマップを用いて、住民自ら住む地域のさまざまな水害リスクを「知る」。そして、どのような避難行動が必要か、またどのタイミングで避難することが良いのかを住民自ら「考える」ことが重要である。さらには、家族と一緒に日常的に考えることが重要である。

そのため、マイ・タイムラインの検討は、STEP 1「自分たちの住んでいる地区の洪水リスクを知る」、STEP 2「洪水時に得られる情報を知る／タイムラインの考え方を知る」、STEP 3「マイ・タイムライン作成」の 3 段階で進める構成になっている。

また、このマイ・タイムラインを若い世代にも広めていくために、小中学生でも検討できるよう、教材の要素を取り入れることでマイ・タイムラインの骨格を作成できるツールとして「逃げキッド」が国土交通省により開発された（図－1）。



図－1 逃げキッド

本稿では、逃げキッドを活用し、さまざまな方法や主体を通じて実施した防災教育の事例について紹介する。

2. 逃げキッドを活用したさまざまな防災教育等の事例

(1) 地域を対象とした取組

マイ・タイムラインの検討主体は、住民一人ひとりが基本であるが、地区の住民が集まり検討会を開催し、隣近所の住民等と意見交換をしつつ検討を進めることで、客観的な意見を取り入れ、地域としての防災力向上を図ることも期待される。

マイ・タイムラインの検討を行う際には、ご近所単位のグループに分かれて、地域リスクや個人が考える避難先などを意見交換し、より良い意見があれば、自身の参考にするのと同時に、ご近所内での防災行動における決めごとや悩みなどについても話し合いながら、マイ・タイムラインを作成していく。

また、作成時のサポートとして、地域の防災リーダーや防災士等に事前に協力を仰ぎ、今後は地域で自発的にマイ・タイムラインの普及を進めることができる土台づくりも合わせて進めている(写真－1)。詳細は、3.(2)で述べる。



写真－1 地域の防災士等が支援する様子

(2) 学校教育を通じた取組

若い世代や家族への水防災意識の醸成は重要であり、若い家族にマイ・タイムラインを広めていくためには、小中学生から保護者へつなげていくことが効果的と考え、その一歩として学校で逃げキッドを活用した防災教育の実施を試みた。

事前に、学校教員と授業計画の調整を行い、一般財団法人河川情報センター(以下、「当財団」という)職員から学校教員に対して逃げキッドを使った体験研修を実施した(写真－2)。対象は小学5、6年生とし、講師は事前研修を受けた学校教員が実施した。

授業時間内は、STEP 1、STEP 2を学校教員が説明し(写真－3)、STEP 3のマイ・タイムライン作成は宿題として持ち帰り、保護者と一緒に検討することとした。これにより、家庭内でのマイ・タイムラインの作成を通じて、多くの世帯で



写真-2 学校教員に対する研修



写真-3 児童とのマイ・タイムライン学習

水防災に関する会話が増え、自分や家族の命を守る行動が記載されたマイ・タイムラインが作成・提出されている。

(3) 防災への意識が高い大学生を対象とした取組

前述したとおり、若い世代への水防災意識の醸成が重要であることから、防災意識の高い大学生に着目し、マイ・タイムラインの普及・啓発の実施を試みた。

愛知工業大学には、「学防ラボ^{まなぼう}」という学生を中心につくる地域防災研究センターの防災研究会があり、そのメンバーと愛知工業大学がある豊田市の職員に対して、オンライン形式によるマイ・タイムライン研修を実施し、マイ・タイムラインについて体験していただき、どのようにこのマイ・タイムラインを若い世代に普及できるかなどについて意見交換を実施した（写真-4）。

その後、「学防ラボ」と豊田市が主体となり、豊田市内の水害リスクの高い地域にある豊田市立畝部小学校や豊田市立浄水中学校で、子供たちにマイ・タイムラインの検討などを、学生自ら指導した（写真-5）。

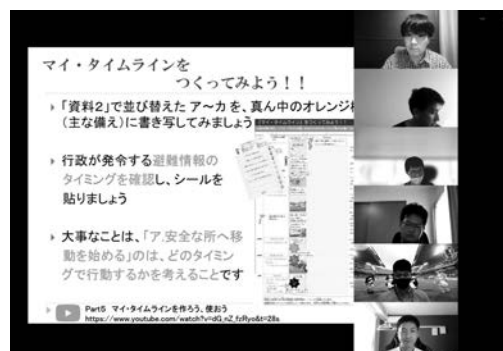


写真-4 大学生・市職員への研修の様子（オンライン研修）



写真-5 大学生が講師となり小学生に教える様子

3. ワークショップ講師の育成事例

マイ・タイムラインの普及・啓発のためのワークショップの講師は、これまで当財団職員をはじめ、行政職員や河川事務所職員、学校の教職員等が担っていたが、人員確保に課題があった。

マイ・タイムラインの普及に先進的な鬼怒川・小貝川流域では、住民のマイ・タイムライン検討をサポートする活動ができる人をマイ・タイムラインリーダーと認定する取組を実施している（図-2）。さらに、国土交通省では、気象キャスターや防災士を対象に講師および講師補助の育成を行い、マイ・タイムラインの普及・啓発のための人材育成を始めている。

(1) 気象キャスターを対象とした講師育成

日頃からテレビやラジオなどのメディアから地域向けの気象・防災の情報発信を行う気象キャス



図-2 鬼怒川・小貝川流域で行われているマイ・タイムラインリーダー制度の仕組み



写真-6 オンライン形式の研修撮影の様子

ターは、難しい話を分かりやすく伝えるプロである。また、防災・減災の取組の一環として、学校等での普及・啓発、一般向け防災講演会等も精力的に実施している点からも、マイ・タイムラインの普及・啓発においてワークショップの講師として気象キャスターは親和性が高いと考える。

全国で活躍する気象キャスターを対象に、マイ・タイムライン検討のためのワークショップ開催のポイントなどをオンライン形式(写真-6)で学んでいただき、現在は各地でマイ・タイムラインの普及・啓発の講師を務めていただいている。

(2) 防災士を対象とした講師・講師補助育成

マイ・タイムラインの普及・啓発をさらに全国展開するため、地域で活躍されている防災士にマイ・タイムラインの普及の役割を担っていただくことを目的とした研修会を、オンライン形式で開催した事例を紹介する。

令和2年10月に実施した研修では、約300名の防災士が参加され、任意の河川を想定したマイ・タイムライン作成についてケーススタディーを行い、チャット等でリアルタイムでの質疑応答を行いながら進めた。

コロナ禍であり、全国の防災士を対象にするため、気象キャスターと同様に、オンライン形式での開催における満足度は非常に不安ではあった。しかし、参加者へのアンケートや質疑等から判断すると、防災や気象の知識が比較的高い方に対して、ワークショップ講師としての資質を学んでい

ただ導入としては、オンライン形式は、非常に効率的で有効であると実感した。

4. おわりに

マイ・タイムラインは、関東・東北豪雨を契機に、鬼怒川・小貝川流域で始まり、全国各地で広まりつつある。マイ・タイムラインは、市区町村が作成するハザードマップを用いて、住民自らがさまざまな洪水リスクを「知る」。そして、どのような避難行動が必要か、またどのタイミングで避難するのが良いかを住民自ら「考える」ことが重要なポイントである。

その一方で、マイ・タイムラインは自ら考え、避難行動できる住民に限定されるため、災害時の要支援者を含む地域全体にこのマイ・タイムラインのエッセンスを浸透させ、「逃げ遅れゼロ」につなげていくためのさらなる工夫を今後も追求していきたい。

また、さらにマイ・タイムラインを全国に浸透させるためには時間と労力を要するが、地区や学校区などの小規模な単位でのワークショップ形式がやはり重要ではないかと考えており、地域の防災リーダー等の力が不可欠であるため、鬼怒川・小貝川流域で先進的に実施されているマイ・タイムラインリーダー制度のような仕組みが各地に広がるように、微力ではあるが働きかけていきたいと考えている。